人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 6, 129-147.

■　特集「関係の開発」

箱庭療法における関係性と心の変容に関する考察

－日本における展開を中心に－

楠　本　和　彦
（南山大学人文学部心理人間学科）

Ⅰ　はじめに

本論は特集「関係の開発」に所収される予定であるが、「関係の開発」を直接的に取り扱うものではなく、箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係とそれに関連する心の変容に関して考察するものである。

心理療法ではセラピスト－クライエント関係が重視される。精神分析における転移・逆転移、クライエント中心療法におけるカウンセラーの３条件など心理療法論において、セラピスト－クライエント関係に言及しない学派はないと言っても過言ではなかろう。箱庭療法の場合、ユング心理学を理論的な基盤としつつ、箱庭療法独自の理論構成もなされてきている。

河合は、箱庭療法を初めとする非言語的な技法に関して、セラピストとクライエントとの人間関係が基礎にあり、作品を見て関係が深まることもあり、関係の深まりにより表現も変化するのであり、これらは相互作用的であると述べている（河合、1992　p167）。また、藤原（2002）は箱庭療法の実施過程には、面接室・箱・砂・玩具という外的な＜もの＞が、セラピスト－クライエントの人間関係における心理的現象＜こころのこと＞になっていくプロセスがあり、人間関係が＜もの＞を＜こころ＞に変換したりつないだりするための必須の意味をもつ。箱庭療法では、そこで立ち会うセラピストとの人間関係という器をつうじて、外的対人性とも現物箱庭性とも離れて、クライエント自身の内的な体験世界そのものに対峙していく心理過程を促進していくと、指摘している。本論では、このように相互作用的、相互関係的であると考えられる、箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係と箱庭作品に表現される心の変容について概観していく。その際、セラピストとクライエントとの関係性を中心にし

て、心の変容において関係性に密接に関係する部分に関して言及する。

Ⅱ　Lowenfelt と Kalff における関係性に関する見解

Kalff（1966）、河合（1969）、岡田（1984）、岡田（1993）、Menuhin（1992）、田中（2004）を参考に、Lowenfelt と Kalff におけるセラピストとクライエントとの関係性に関する見解を示す。

１．Lowenfelt（1890－1973）

1925年に、Lowenfelt は小児科を辞め、子どもの精神医学的治療を開始している。彼女はユング派による箱庭療法（Sandplay therapy）に先駆け、その基礎となる世界技法（The World Technique）を創始した。彼女はWells（1911）の床ゲーム（Floor Games）から発展させ、世界技法を創始した（1929）。床ゲームは、部屋ほどのサイズの砂箱に、木、紙、粘土、ミニチュアの人形や動物を用いて、町や島を作っていくゲームであった。それに対して、世界技法では、箱庭療法で用いられる砂箱よりひとまわり小さな、Ａ３の用紙２枚分くらいの砂箱（およそ縦50×横75×高さ7cm）を用いる。クライエントの子どもたちはこの砂箱の中で、砂で造形したり、玩具などを用いて、何かを作ることを求められた。その技法は構成的治療法とも呼ばれ、世界が構成されることは、子どもの心の投影であり、表現であると考えられた（世界像　World Pictures）。彼女は、様々な玩具や色の着いた棒、紙製品、金属や粘土製の物を最初は「ワンダーボックス」（Lowenfeltのクライエントの子どもたちの命名）という箱に中に入れていたが、後に引き出しのついた整理棚に移された。

恥ずかしながら、筆者は現在、Lowenfelt の原典に当たることができていないため、Lowenfelt が世界技法におけるセラピスト－クライエント間の関係性に関して、どのような見解をもっていたのか、詳細に述べることができない。Kalff や河合や Menuhin の記述からその一部を垣間見ることができるのみである。Lowenfelt は、「精神分析家の方法は余りにもフロイトの理論を児童にあてはめて解釈しようとしすぎる点を指摘し、分析家が治療に必要と考えている『解釈や転移』なしに治療できる方法として」（河合、1969　p10）世界技法を思いついた。Lowenfelt は世界技法である家を置いたとしても、それは「家」を表すかもしれないが、同じくらいの可能性で家以外のもの（例えば、安全や単なる台座としての使用など）を表しているかもしれないと、解釈の柔軟性について説くとともに、連続して世界を作ること、それらを記録しておくことが子どもたちの障害や困難の改善をもたらすと考えている（Menuhin、1992）。Menuhin（1992）にある Lowenfelt と Kalff の往復書簡を見れば、世界技法の作品に対して、Lowenfelt が解釈的な理解を行わなかったわけではないことがわかる。しかし、Menuhin が Lowenfelt を「フロイト的な設定と時代精神の中に

あったとはいえど、因習的な考えを打ち破り、なおかつ創造的であった」（Menuhin、1992　p153）と述べており、また、Kalff が Lowenfelt は「自身を子供の世界の中にそっくり移すべきだと考えたのであり、その結果彼女は独創的な考えで、子供が１つの砂箱（中略）に１つの世界―子供の世界―を建設できるような遊戯を行ったのだった」（Kalff、1966　p24）と述べているように、Lowenfelt は転移や解釈を子どもの心理療法に援用することだけに固執せず、世界技法の作品に子どもの内的世界が象徴的に表現されること、それをセラピストが受容し、共感的に理解することが心理療法において有効であることを見出していたと推察される。

２．Kalff（1904－1990）

Kalff は1956年 Lowenfelt に世界技法を学んだ。その後、Kalff はユング派のトレーニングを受け、ユング心理学の理論を導入した箱庭療法（Sandplay therapy）を確立した。

岡田（1993）は、Kalff の箱庭療法の特徴を以下の５点にまとめている。⑴セラピストとクライエントとの関係を重視し、その関係を母子一体性と呼んだ、⑵箱を中心に、自由で保護された空間を作るべきこと、⑶その空間でクライエントの自己治癒力が発揮されること、⑷元型的イメージが出現することがあること、⑸置かれた玩具の象徴的意味を知ること、としている。本論との関連では、セラピストとクライエントとの関係性に対する考察に、⑴、⑵が直接的に関連する。また、⑸も間接的に関連すると考えられる。心の変容に対する考察には、⑵、⑶、⑷が直接的に、⑸も間接的に関連する。

ここでは、Kalff（1966）、Kalff（1982）の考えるセラピストとクライエントとの関係性に関して、母子一体性、自由で保護された空間の観点から概説する。

Kalff は母子一体性を発達的な観点から次のように考えている。ユング心理学における全体性の原理は幼年時代から現れる。ユング心理学でいう自己は誕生時から精神的な発達過程を支配しており、人間は１つの全体的なものとして生まれる。１歳未満の子どもの場合、その全体性は母親の自己の中に保存されており、母親の授乳や寒さからの保護など母親の愛により、子どもは安全に保護されている。そのような段階、状態を、Kalff は母子一体性と呼んだ。この後、子どもの自己（全体性の中心）は母親の自己から分離されるが、母親に保護されていることを知り、信頼関係が生じていく。それを基盤として、２歳の終わりから３歳の初め頃の第３の段階では、自己の中心は子どもの無意識の中に固着し、全体性の象徴の中に顕になってくる。人格の発達において、象徴的に自己が顕になることが人格の発展と統一のための保証となるとした。

次に心理療法的な観点では、Kalff は以下のように考えた。

脆弱な神経症的な自我発達の場合に象徴における自己の顕現が起こらないのは、母性の保護の乏しさ、発達の早期に戦争、疾病、周囲の無理解などの外的

影響により、決定的に障害されたためである。それゆえに、子どもの心理療法においては、自由で保護された空間を、セラピスト－クライエント関係の中に作り出すことがセラピストの任務となる。セラピストがその子どもを充分に受容し、あらゆる出来事にその子ども自身のように誠実に、積極的に関与する。そのような空間が生じ、子どもがそれを感じとるといった信頼関係が事情によっては、母子一体性を再現することを可能にする。また、そのような信頼関係は心理療法における一種の母子一体性である。

Kalff は自由で保護された空間における象徴体験こそが重要であると考えた。自由は心の内外の両面に関連する。箱庭療法における外的な自由は、クライエントがたくさんの玩具の中から、もっとも気に入るものを自由に選べるという点にある。多彩で、多様な玩具がクライエントの多様な感情をかもしだし、内的な創造的多様性を触発する。

自由であるためには制限が必要となるが、箱庭療法の場合、砂箱が表現されるものに１つの制限を加える。その制限の中で、はじめて変容が生じ、子どもは無意識的に、自由で保護された空間としての特徴的な体験を行うことができる。この制限は心的エネルギーの破壊性や拡散から保護する役割をもつ。この制限により、幾多の象徴が凝縮して自己表現（Self-expression）の形をとりうるように水路づけされることが可能となる。また、この自由は無限のファンタジーの可能性を、制限は日常の現実の反映としての必要性の要素を表していて、その統合はクライエントが多くの内的な可能性を受け入れることと、外界との必要な適応を身につけることとを、自力で統合するように整える。そのようなことが生じるために、セラピストは内的水準において、自由な雰囲気と保護的な受容とを必然的にもたらす状態を作り出すことが重要となる。その一側面として、セラピストは判定的なあり方を避け、患者のありのままの姿を受け入れるのを自由にするという感受性豊かな開かれの状態（a state of receptive openness）が必要となる。もう一つの側面として、セラピストは自分自身の愛の包容力を発展させなければならない。この愛はクライエントを病者としてだけでなく、一人の人間として見ることを可能とする資質であり、クライエントの心の中の未だ弱きものを守り、保護する役割をもつ。

また、セラピストは箱庭の象徴を作品の流れの中で解釈・理解するが、それは言語として伝えられる必要はないと考えた。但し、事情によっては、セラピストの理解を、子どもに理解できる方法で、かつ、子どもの外的な生活状況との関連において説明されることもある。

Ⅲ　箱庭療法における関係性に関する展開

１．箱庭療法の日本への導入と展開

箱庭療法は河合により、日本に紹介導入された。河合はユング研究所に留学

中、Kalff から箱庭療法の教えを受け、帰国後、1965年から天理大学と京都市カウンセリングセンターで箱庭療法の実践を始めた（河合、1969）。その後、箱庭療法は、病院精神科やクリニック、小児科、カウンセリングセンター、教育研究所、個人心理療法家など様々な機関において広く普及していった。1987年には日本箱庭療法学会が設立され、学会誌「箱庭療法研究」は年 1 巻 2 号発行されている。現在の会員数は1800名に達そうとしている（2005年現在）。また、国際箱庭療法学会の国別の組織として、JAST（Japan Association Sandplay Therapysts）が組織されており、2002年の状況では国際箱庭療法学会員 9 名で構成されている（樋口、2002）

箱庭療法は Kalff により創始されたが、その発展は日本での展開抜きには語れない。樋口（2000）は「私の心の深い所では、私は箱庭療法は必ずしもカルフの専売ではなくて、最初からこれは河合隼雄との交流の所産ではなかったかと思っている」と述べている。箱庭療法は、東洋の文化に深い関心を持ち、日本の箱庭療法と交流し、それらの影響も含め変容し続ける Kalff と河合との合作であるとの見解もある（河合・樋口・山中・岡田、2002）。

また、日本における箱庭療法の展開が、他国に影響を与えた側面も見逃せない。河合は1982年の箱庭療法の国際学会に関して触れ、「箱庭療法は日本が質量ともに最も発展していることが明らかになった。量はもちろんのこと、質的にみても高い水準を示していることは、参加者の人々に認められたと思う」と述べている（河合・中村、1984）。樋口によると、他国の箱庭療法家は、日本での箱庭療法の発展とその重要性を、Kalff を通して知っていたということである。（河合・樋口・山中・岡田、2002）

2．関係性に関する Kalff 理論の踏襲

⑴　Kalff 理論の踏襲

Kalff は箱庭療法指導のため、日本を 9 度訪れている（河合・樋口・山中・岡田、2002）。そして河合を初めとする日本の箱庭療法と Kalff は相互に影響を与え合いつつ、発展していった。ここでは、Kalff の関係性に関する理論の中で、日本の箱庭療法においても変わらず重視された側面について概観する。

上述したように Kalff は箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係を母子一体性、自由で保護された空間として重視した。河合（1969）、河合（1982）、岡田（1984）、岡田（1993）、山中（2002）など多くの研究者がこの 2 つの考えを紹介し、重要なものと見ている。例えば、河合（1982）は、「治療者とクライエントとの関係を重視し、それを基礎としてクライエントが作った箱庭作品を、彼の『世界』の表現として、あくまで尊重してゆこうとする」との基本的立場を表明している。続けて、心理療法におけるセラピスト－クライエント関係の重要性について触れたあと、Kalff に言及し、「カルフはこの治療者とクライエントとの関係を『母と子の一体性』（Mutter-Kind-Einheit）という

言葉で端的に表現し、クライエントに対して、『自由にして保護された空間』（freien und zugleich geschuzten Raum）をその関係のなかに作り出すことが治療者の任務であると述べている」としている。岡田はクライエントと人間関係に関して、母子一体性を取り上げ、「箱庭療法のクライエントと治療者との関係の根本は、カルフのいう母子一体性にある」と述べている。続けて、「カルフは、母子一体性が作る空間を、『自由で保護された空間』と表現しているとも考えられる」（岡田、1993　p27-28）としている。山中（2002）は箱庭療法を「『母子一体性』ともいわれる暖かく自由な治療的雰囲気のもと、つまり『自由にして保護された空間』において、治療者の臨在のもとに行われる」と説明している。

このように、Kalff が箱庭療法におけるセラピスト－クライエント間の関係性において重視した 2 つの考えは、日本の箱庭療法理論においても、中心的な理論として受け継がれ、重視されている。

⑵　母子一体性、自由で保護された空間に関する留意点

前項で、Kalff が提唱した母子一体性、自由で保護された空間との考えが日本においても、踏襲され、重視されていることを見た。この 2 つの考えへの否定ではないが、日本において箱庭療法が発展していく中で、この 2 つの考えに関する留意すべき点に触れられた見解がある。

織田（2002）は、自由で保護された空間という考え（神話）が Kalff の仮説の中で最も重要なものとしつつ、他の臨床家がその神話をそのまま借用するだけでは、その個人にとって本当の意味では役に立たないとする。Kalff の神話を借りてくる場合でも、それを自分自身の神話として再発見することが、心理療法の道具として用いることができる自分の「生きた神話」となると述べている。また、織田（2000）は母子一体性に関して、子どもとのセラピーにおいては、セラピストが「母なるもの」に同一化しやすく、母子一体性ということばには、セラピストに中立性を逸脱させる危険性があると指摘している。

河合（1982）は、母子一体性と自由で保護された空間という関係の重要性を指摘しつつ、「この関係が成立すれば、別に箱庭など無くとも治療は進展すると言ってもよいほどであるが、ここに述べられていることを実際に行うことは極めて困難であり、そのためには（中略）治療者の訓練ということも必要となってくる」と、このような関係が成立することの重要性と難しさを共に述べている。

東山（1994）は、母子一体性も含めた箱庭療法におけるセラピストの態度に関して、安易に考えられている向きがなくはないと述べ、箱庭に表現されたクライエントの内的イメージの意味をセラピストが理解していることや箱庭療法のセラピストが自己の直観をクライエントとコミュニケートすることの重要性などを指摘している。

3．箱庭療法における関係性に関する理論的展開

⑴　セラピスト－クライエント関係の強調

すでに述べたように、Kalff は箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係を重視した。日本における箱庭療法の理論的発展の一つはセラピスト－クライエント関係のさらなる強調にあると考えられる。河合（1982）は基本的な立場の確認の節の中で、「クライエントの自己治癒の力に対する信頼と、そのはたらきを促進するための治療者・クライエント関係の重視ということが存在している」とする。これは一見すると Kalff 理論の単なる踏襲に見えるかもしれない。しかし、これは Kalff や河合が共通の理論的基盤としたユング心理学および心理療法理論全体の発展の中で捉えることが適切であると考えられる。

河合は、Kalff が河合らを初めとする日本の箱庭療法から受けた影響として、箱庭作品の象徴解釈の変化と治療者の態度の重要性の強調を挙げている（河合・中村、1984）。織田や山中もまた、初期の Kalff の著作や事例検討の場でのコメントにおいて、象徴解釈が中心となり、セラピスト－クライエント関係への言及が少なかった点に関して述べている（織田、2000、河合・樋口・山中・岡田、2002）。

河合（1990）は Kalff の人格そのものが自由で保護された空間を体現している存在であったと述べている。また、木村（1999）によると、実際の箱庭療法場面での Kalff はゆったり受け入れるばかりでなく、より積極的に制作者にその表現意欲を高めさせるようなポジティブな刺激となる表情や態度であった。河合が Kalff（1966）のマリーナに対する行動を「象徴の『解釈』などというよりは、マリーナからの象徴的な問いかけに対して、治療者は自分の身体をひとつの象徴的表現の器として、応えかえしたものということができる」と指摘するように、Kalff は初期の頃には、実際の治療的態度と理論化との間にあるギャップが存在していたと考えられる。理論化の際に象徴解釈が優先されていた事情に関しては、河合や樋口や山中（河合・樋口・山中・岡田、2002）が述べている。

河合は「治療者にとって、箱庭の表現を『解る』ことより、『味わう』ことの方が大切である」（河合、1982）と述べたり、「よく治療者の人たちに、『解釈しないでください。鑑賞してください』と言ったんです」（河合・中村、1984　p105）と述べ、箱庭療法における治療者の態度あるいは箱庭作品に表現されたクライエントの内的イメージに対する関係性を強調する。先に述べた Kalff の治療態度における関係性の重視と象徴解釈を中心とした理論化とのギャップを日本の箱庭療法において生じさせないためには繰り返し述べる必要があったためである。

⑵　転移・逆転移に関する考察

Kalff（1969）では、セラピスト－クライエント関係において母子一体性、

自由で保護された空間という考えが中心になり、転移という概念が使用されることは少ない。日本語版の目次を見ると、p42にのみ、「転移状況」との用語が使用されているが、そこでの使われ方もまた「＜母と子の一体性＞を生み出した転移状況」と、母子一体性の観点から使用されている。

それに対して、河合（1985）では、箱庭療法における転移と逆転移の問題が取り上げられている。河合は、強い転移・逆転移と深い転移・逆転移の違いについて述べている。強い転移・逆転移の場合、セラピスト、クライエントの自我に向かって横に働いているのに対して、深い転移・逆転移の場合には、無意識に向かって下に働く。そして、セラピストがクライエントに箱庭療法に誘う場合には、すでに深い逆転移が生じはじめていること、箱庭が深い転移関係が成立するための「通路」としての役割を持つこと、深い転移が生じるだけの通路として、セラピストの人間性を鍛えていく必要性を指摘している。

他にも日本の研究者による、箱庭療法における転移・逆転移に関する考察は、織田（1991）、岡田（1993）などがある。

織田（1991）は箱庭療法と逆転移に関して述べている。織田は「病者との関わりを契機として生まれる治療者の心の動き全体」としての逆転移を、セラピストが意識することの重要性をまず指摘している。そして、セラピストの心の動きが箱庭制作の場にいかに参加しているかが重要であること、セラピストとクライエントとの物理的距離が心的距離と密接につながっていることに言及する。さらにセラピストの気持ちや感情を支配しているものを意識化する明確さとセラピスト、クライエントとを共にとらえている布置に身を任せるためのあいまいさを両立させるために、任意に心をスプリットさせ、一方ではクライエントと体験を共有し、他方では意識化の作業をおこなうことが求められるとしている。

岡田（1993）は箱庭療法における転移関係に関して、箱庭療法において箱や砂がはたす遊び的役割の側面、アニムス、アニマといった内なる異性像と転移との関連について述べている。「箱の中で作られる」箱庭療法の独自な技法や作品が転移にクッションが与え、セラピストは転移を受容しやすくなる。また、クライエントは砂の利用を通して、母性性を体験するとともにセラピストからも母性性を得て、それらを区別することなく、治療関係の中で母性性を体験していくとする。次に、岡田は、女性クライエントが「自分です」と言い男の子の玩具を、セラピスト（外的な性は男性）と推察できる助け手として女の子を置き、セラピーが展開していった例を紹介しつつ、セラピスト、クライエント双方の内的な性も含めた転移関係への考察の必要性を説く。

河合俊雄（2002）は、箱庭療法における転移・逆転移は、狭義の転移・逆転移関係ではなく、ユング心理学でいわれる、クライエントとセラピストの間にある第三のものとしての魂という考えに沿っており、箱庭はクライエントとセラピストとの間にコンステレートされた第三のものとしての魂なのだと述べて

いる。

転移という用語は使用されていないが、三木（1994）は箱庭療法に関する、セラピストとクライエント関係における内的空間性について述べている。三木は箱庭療法がセラピストとクライエントとの二者関係を軸にしていることを基盤としつつも、自らの箱庭療法の 2 事例を紹介しつつ、二者関係を包含するセラピストの内的イメージについて言及する。その内的イメージとは、現実の二者関係を俯瞰できる視点がセラピストに内在することである。人工衛星で宇宙に出た人が地球も月もまるごと見えるような高さと広がりと深さに統合されるイメージがセラピストの内的イメージとして要求されるとしている。この考えは、上述した、河合（1985）の深い転移にあい通じるものではなかろうか。

本節で見た箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係に関する発展は、本来ユング心理学がもっていた転移・逆転移の治療的有効性に関する理論が、精神分析における逆転移の再考の影響もあり、再構築されたものと見ることもできよう。また、無意識がもつ意識との相補性、創造性を尊重するセラピストとクライエントとの関係性について、箱庭療法の実践から生まれた知見を包含したものと考えることもできるだろう。

⑶　クライエントおよびその内的過程への全人的関与・参与

河合は中村との対談の中で、何度もコミットメントという言葉を使っている。例えば、中村の箱庭の枠の重要性への言及に対して、「そうです。だからこの限られた枠のなかで、しかも限られた部屋に入るということで守られているわけです。『そういう守りのなかでこそ、あなたの内面は表現できるんですよ、それに私もいますから』というふうに、治療者が居て、その人も髑髏の手が動くのを感じたくらいのコミットメントがあってこそ可能だと思うんですね」（河合・中村、1984　p51）と述べている。これはセラピールーム、箱庭、セラピストの三重の守りの中で、セラピストが箱庭作品とクライエントに自分の全存在をかけて関与していくことの重要性と説いたものと考えられる。また、河合（1982）は箱庭療法における守りに言及した後、箱庭における表現が「『世界』だという意味において、治療者もそのなかに何らかの意味で包摂されているのである。（中略）従って、治療者は一切の解釈など与えず、その過程に内的に参画するのである」と述べている。このようにセラピストがクライエントやクライエントの内的世界に関与する様について、河合は、箱庭療法を実施する契約が成立する場合を比喩的に、「私がビルの下にいて、両手を広げて十階の人に『どうぞ』と言っているみたいなのですよ。『落ちてきても死にはしませんよ』と言っているのと同じことでしょう」（河合・中村、1984）と述べ、その契約の凄まじさを表現している。

箱庭療法における「全人的関与（コミットメント）」（河合、1992　p110）の強調は、ユング心理学のセラピスト－クライエント関係理論を基礎にしている

ためである。河合（1998）はユング派の心理療法のもっとも基本的なことの一つとして、コンステレーションを挙げている。その中で Spiegelman が Meier の分析を「マイヤーは自己実現の過程をコンステレートする」と表現したことに触れ、マイヤーは実際には何もしなかったのだが、その無為こそがコンステレーションに通じてくると述べている。そして、「このような外見的には無為に見えるが、内的には多大なエネルギーを使って、クライエントの自己実現の過程に参与していく、そのことはとりもなおさず分析家の自己実現にもつながる、という態度は、ユング派の心理療法の根本的なもの、と言うことができる」（河合、1998　p10）とする。この文章には、ユング心理学における自己実現－コンステレーション－全人的関与の関連が端的に示されている。Kalff や河合を初めとする多くの箱庭療法の研究者が、箱庭療法におけるセラピスト－クライエント関係の重要性を説いているが（木村1993、山中、2002など）、その背景には上にほんの一端を示したにすぎない広大なユング心理学の理論背景がある。

東山（1994）は、箱庭療法のセラピストは何もせずに見守っていればよいと安易に考えられている向きがなくはないと指摘し、安易な理解に警鐘を鳴らしている。そして、見守ることには箱庭に表現されたクライエントの内的イメージの意味をわかっていることやセラピストとクライエントの両者に役立つ知恵の必要性について述べている。さらに解釈せずに、セラピストの直観をコミュニケートする重要性やそのために必要とされる背景となった膨大な知識や感受性について述べている。東山はこの論を、ロジャーズのカウンセラーの 3 条件と関連させつつ展開している。この見解もまた、セラピストがクライエントとクラエントが箱庭作品に表現する内的イメージにセラピストが全人的に関与する態度の顕現の一つであると考えられよう。

齋藤（2002）は、クライエントの内的過程への関与を、「箱庭『風景』を生きる」という用語で表現している。箱庭療法におけるセラピストはクライエントのイメージ世界の同行者として考えられ、視覚だけでなく、あらゆる感覚を伴ってその風景を感じることが前提であるとする。風景を「生きる」ことは、「自分のからだの動きとともに世界が展開する」ことと結論づけている。

箱庭療法において、セラピストはただその場にいるだけでクライエントが治っていくとの誤解がなくはないが、ここで見てきたように、箱庭療法を行うセラピストが、クライエントやその内的過程に全人的に関与・参与することが重要であり、それが心の変容や治癒を生じさせていくのである。

⑷　セラピスト・クライエントと箱庭の箱または作品との関係性

箱庭療法ではセラピストとクライエントとの関係性に加えて、箱庭制作とする箱もしくはそこに表現された作品との関係性が重視される。言語を中心とした心理療法であれば、言語をセラピストとクライエントとの間を繋ぐ媒体と捉

えることもできるが、セラピストとクライエントとの二者関係として捉えられることが多い。しかし、箱庭療法の場合、箱庭作品という明らかな媒体があり、それがセラピーに重要な影響や意味をもたらす。

岡田（1984）はセラピストとクライエントと作品の関係を三者関係と捉える（図１）。

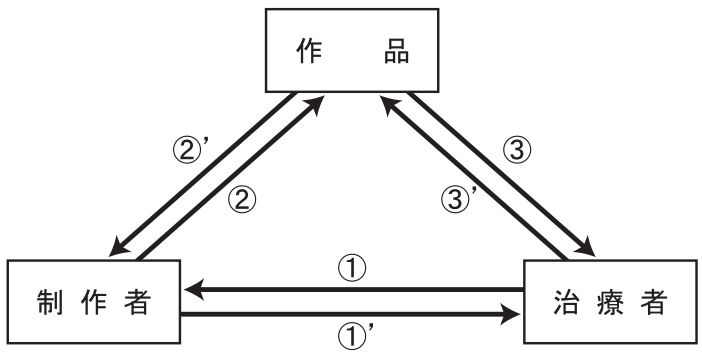

図１　箱庭療法におけるセラピストとクライエントと作品との関係（岡田、1984）

①と①'は今までも述べてきたようなセラピストとクライエントとの関係性に関するものである。②はクライエントの作品による自己表現であり、②'は作品からクライエントに働きかけてくる作用である。③は作品がセラピストに与える作用、作品のセラピストの無意識への働きかけ、コンプレックスの刺激などが含まれる。③'はセラピストの印象、考え、感情、解釈などであり、これらは作品を媒介として（②'）クライエントへの働きかけとなる、としている。木村（1985）も岡田の図式を引用しつつ、媒体を使用する他の心理療法（絵画療法、遊戯療法）と箱庭療法を比較し、箱庭療法の特徴について述べている。

このようにセラピストとクライエントと作品または箱との関係を論じる研究者は多い。これは Lowenfelt が世界技法によって表現されたものを世界像と捉え、Kalff が箱庭療法において自由で保護された空間での象徴体験を重視したことからの理論的発展と考えられる。河合は（1982）は、箱庭療法おける、クライエントが自分の作品から受けているフィードバックや治療状況という限定と箱の限定との二重の守りに言及している。また、河合（1985）が箱庭療法における深い転移が成立するための通路として箱庭を論じたことも同様の観点と言えよう。

織田（2000）は、箱庭は錬金術的な容器に相当するとし、セラピストとクライエントとを錬金術の容器を取り囲む錬金術師たち（達人とシスター）に見立てている。そして、このような容器はセラピストとクライエントの両者からある程度の距離をおいた、中間領域（第三領域）で体験されること、錬金術的な容器はセラピストとクライエントとの間の場に布置することによって、二人を容器のなかに収容して守るという機能をもつことに関して指摘している。その

容器はセラピストとクライエントとの関係性が深まり、「想像力」を用いて様々な体験をし、「親密であるにもかかわらず、互いに踏み込まない関係」が成立した時に初めて布置するとしている。河合もまた、箱庭療法全体のセッティングが自己治癒の過程が生じてゆくための適切な「容器」として自然に機能していること（河合、1982）やセラピストが錬金術の容器でもあり、その中にも入っていてその中の化学変化に引きいれられる存在である（河合、1984）と、述べている。

箱庭療法は、箱庭という特殊な媒体をもっており、それが心の変容や治癒を考える上で重要な観点となる。そしてそれは箱単独で考えるだけではなく、セラピストとクライエントをも含んだ全体の関係性の中で捉えることが重要である。

Ⅳ　箱庭療法における心の変容　―関係性との関連の中で―

箱庭療法における心の変容に関する理論は、セラピストとクライエントとの関係性に直接的に繋がるものばかりではなく、多岐にわたっている。ここでは、本稿の性質上心の変容に関して、今まで見てきたセラピスト－クライエント関係に直接的に関連するもののみを取り上げることにする。

１．クライエントの自己治癒力・個性化の過程に対する信頼

河合は箱庭療法はクライエントの自己治癒力を最大限に働かせる技法であると述べる（河合、1982）。

Kalff が自由で保護された空間を強調したり、河合が箱庭療法では、クライエント本人が治るのであり、セラピストはクライエントが治る絶対的な場を提供する役割をもつと語る（河合・中村、1984）その前提には、ユング心理学におけるクライエントの自己治癒力に対する信頼がある（河合、1982）。

Kalff は「自己の顕現化（Manifestation des Selbst）は人格が発展していく際の最も重要な瞬間である」（Kalff、1966　p9）と述べた。そして、それを基盤とした自我の発達を Neumann の理論を参考にし、１．動物的、植物的段階、２．闘争の段階、３．集団への適応の段階と考えた。河合（1969）は、Kalff の言う自我発達の段階には捉われず、箱庭の作品を継時的に見て、各クライエントの表現の流れに主題を見出すことを重視した。しかし、それは Kalff 理論の全否定ではなく、ユング心理学における無意識の意識への相補性、心の全体性など心がもつ人格の変容・統合の力への信頼は同様に重視する。これは、河合が「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程を、ユングは個性化の過程（individuation process）あるいは自己実現（self-realization）の過程と呼び、人生の究極の目的と考えた」とユングの理論を紹介し、「われわれが心理療法において目的とするところも、結局は

このことにほかならないのである」（河合、1967　p220）とすることからも分かる。そして、河合は人格の統合や変容に関する主な主題として、「二つの世界の統合」、「領域の反転」、「戦い」、「死と再生」、「領域の拡大」「渡河」などが箱庭療法において表れることを指摘している（河合、1969）。

河合（1982）は箱庭の表現には、ヌミノースなものの表現がなされやすいことを指摘し、心理的障害に悩まされることで、日常生活のゆきづまりを体験しそれに直面することにより、ヌミノースな存在との接触が行われその適切な接触の回復から新たな力を得て問題が解決されることが多いことに言及している。そして、それを自己治癒力の発現と考えることもできるとしている。箱庭表現において、領域を区分されることもよく行われると指摘し、日常と非日常、生と死、善と悪、意識と無意識、文化と自然、心と体などの多くの対立物を人がどう受けとめ、統合するかとの課題と関連させ言及している。これもまた人格の統合、変容と関係の深いテーマである。さらに箱庭作品における 3 領域の分割の表現を取り上げ、対立する 2 つのものを仲介、媒介者する存在や、意識、個人的無意識、普遍的無意識の心の 3 層構造、魂・心・体の 3 領域との関連から考察することのできる興味深い主題であるとする。さらに河合は、「箱庭療法において置かれるいわゆる自己像は、自我と自己の枢軸上に存在する、変化し成長しつつある自我の像として把えることが適切であると思われる。そこには何らかの意味で、将来への展望がこめられているのである」としている。ここで河合が言及するのは、ヌミノース、領域の区分、自己像と一見違ったテーマのように見えるが、クライエントの自己治癒力、個性化、人格の統合への過程を巡る顕現の多様さという観点からすれば、共通の理論的背景から導かれた言及と見ることができよう。

河合（1991）は、心理療法の根本は自己治癒にあり、それはクライエントの無意識に内在する自己治癒力を活性化することが必要であり、そのためにはセラピストや箱庭が必要となると述べている。そして、自己治癒力が活性化されるためには「守り」が必要となり、その役割をするのがセラピストおよび箱庭という「枠」であることや、それに加えてセラピストの役割として、無意識に存在する自己治癒力に対して「開かれた」ものでなくてはならないと続ける。セラピストのそのような役割を「カルフは非常に適切に『自由にして保護された空間』を提供するものである、と述べている」とする。

ここでは、河合の論を中心に取り上げたが、このような観点は多くの研究者によって支持され、日本における箱庭療法における治癒、心の変容の理論的基盤となっている。

Spiegelman は「絵画、彫刻、ダンス、および特にサンドプレイ（箱庭）のような非言語的な能動的想像法には、無意識的のなかに落ち込むという危険がなく、したがって児童を対象にしてごく一般的に利用されていることを指摘しておくことは非常に重要です」（シュピーゲルマン・河合、1994 pⅲ）と述べて

いる。また、河合も「箱庭療法は非言語的に行う能動的想像法と考えると、その本質が理解されやすい」（シュピーゲルマン・河合、1994　p33）と述べている。齋藤（2002）もまた、箱庭療法と能動的想像の類似に触れ、箱庭療法もまた、能動的想像のように、セラピストはクライエントに同行して、箱庭というイメージ世界を歩き回り、その風景を生きていくと指摘している。ユング心理学辞典によると、能動的想像とは、ユングが1935年に公にした用語で、「覚醒状態で夢を見る過程を表す。まず、特定の問題点、気分、絵画、できごとに精神を集中し、さらに一連の連想されるファンタジーが展開するがままにしておき、徐々に、ドラマ的な特徴を帯びるにいたらせる。その後、イメージ自体が生命力を帯び、イメージ自体の論理に従って展開する。（中略）能動的想像は、意識的な捏造とは対照的である。実演されるドラマは『観客の関与を強いている』ようであり、無意識の内容が覚醒状態にさらされる新たな状況を創造する。ここに、超越機能の働きの証があるとユングは考えた。つまり、意識と無意識がともに協力して働くのである」とある。河合が非言語的に行う能動的想像というように、一部の手順など異なる点もあるが、肝要なのは、箱庭療法のもつ超越機能に関することであり、生命力をもったイメージにより、意識と無意識が協同して個性化の過程を促進させることにあると考えてよいだろう。

河合俊雄（2002）は箱庭療法における主体の観点を取り上げている。箱庭作品には主体のあり方が表されるが、主体であるということは自分を何かに委ねてしまい、コントロールを失うことであるとする。箱庭を作っていると自分を超えた思いもかけないものが生じてくるが、これゆえに自己治癒力が可能になると述べている。

光元は、心理療法において「表現するとは象徴表現をすることですし、象徴とは他者との共存をこそ目指すものです。共存するとは他者と和解することであり、和解するとは治癒することです」と述べ、「表現＝象徴＝共存＝和解＝治癒」という図式を示している。但し、この場合の共存や和解は、内的世界の中で内的対象としての他者との共存や和解をいうとし、傷が癒され内的に他者と共存や和解できた時、外的に他者と共存や和解への可能性が開かれるとしている（光元・田中・三木、2001）。

ここに見てきたように、箱庭療法における心の変容や治癒に関して、クライエントの自己治癒力・個性化の過程の観点が非常に重要であることがわかる。

2．コンステレーション、物語

Ⅲ－３－⑵でも触れたように、コンステレーション（布置）という考えも箱庭療法の治癒、心の変容に関して重要なものとなる。河合（1998）はユング派の心理療法で基本と考えられることの一つとして、コンステレーションを挙げ、ある人の内的な状態と、それを取り巻く外的な状態との間に対応関係があるような状態について触れ、「ユングは、内的、外的事象があるまとまりのあるイ

メージを形成しているように思われるとき、それをコンステレーションと呼んでいる」と紹介している。

河合は箱庭の事例のコメントの中で、セラピストとクライエントが共に箱庭作品の髑髏の手がピクリと動いたと見えたとの報告に対して、「よほどのコンステレーションがあったと思っていい」と述べている（河合・中村、1984）。山中（1993）はコンステレーションの項目の中で、「元来、全く関係ないと思われたいくつかの現象が、ある『関係性』の相において互いに『布置』されているとき、それらの事象が起こってきたときや、あるいは類似の観念の想起にあたって、突然、その内包する『意味』が見えてくることをいう」と説明する。そして、この観点は「意味」を追求する心理療法においては大切なものであるとし、「ことに、夢分析や箱庭療法、あるいは遊戯療法などの心理療法の進行中に、突如として、この『布置』に気づき、『意味』が見えてくることが多いものである」としている。河合の著作で、コンステレーションが語られる時、イメージの例として夢が取り上げられることが多いが、『物語と人間の科学』（河合、1993）の 2 章「コンステレーション」には箱庭療法のマンダラ作品が取り上げられている。

河合（1991）はセラピストはコンステレーションを読みとる力をもっていなくてはならないとし、一般の人なら、馬鹿げていると言って棄て去る現象もすべて取り入れて、全体としてのコンステレーションを読むと、思いがけない展望が開けてくるとする。岡田（1984）は、ユングのコンステレーションに関する定義を紹介した後に、河合が述べる箱庭療法おける全体的布置は広い意味で使われており、セラピストとクライエントとの出会いも含んでいるとする。そして、面接室外の様々な出来事がセラピーの中でセラピストとクライエントのまわりに布置されることが、箱庭療法の場合、セラピストとクライエントの間だけでなく、箱庭作品にも同様のことが生じ、二重構造になるとしている。

藤原（2002）が指摘するように、既製品である現物の玩具を用いて制作される作品が、＜もの＞から＜こころのこと＞へと変換していく機能をもつ箱庭療法の特徴を考えた時に、箱庭療法においてコンステレーションが生じることやセラピストがそれを読むことの重要性が見えてくる。ユング心理学ではイメージは外界と内界との接点に生まれるものとされ、箱庭療法で表現される作品もそのようなイメージとして理解されている。セラピストとクライエントが共に、箱庭に深く全人的に関与するとき、深い転移が生じ、外界の現物でしかなかった玩具が＜こころのこと＞を表現するイメージとして立ち現れてくる。そのような作品、全人的に関与するセラピストとクライエントをも含めたセラピーの場に、「内的、外的事象があるまとまりのあるイメージ」の形成が生じやすくなると考えられよう。そして、作品という目に見えるものがあるために、箱庭療法では、コンステレーションを読むことが比較的行いやすいとも考えられる。

河合は導入当初から箱庭作品を全体の流れとして見ることを提唱した（河合、

1969)。または河合（1993）はコンステレーションというのは、一瞬のコンステレーションとして見せられるが、これを展開していくと物語になるとし、心理療法ではクライエントが自分の物語を見出していくのを助けているとする。河合（1991）は、同様に箱庭作品は時間と空間の一体化したスピリットの顕現として見ることもでき、一瞬に見ることのできる箱庭作品の１枚のスライドも時間的に展開すると、ひとつの物語として表現される可能性について指摘し、ある箱庭作品から作られた物語を紹介している。箱庭療法の一つの作品や一連の流れからクライエントの個性化の過程の物語が生まれ、展開し、それをセラピストが読みその過程をセラピストが同行すると同時に、箱庭作品からフィードバックされてくる意味をクライエントが見出すところに、箱庭療法の治癒、心の変容のメカニズムがあると考えられる。

３．ぴったりとした自己表現

Lowenfelt は世界技法により表現されるものを世界像と考え、Kalff（1966）は箱庭療法において、保護された空間における象徴体験を重視し、箱庭の制限により、幾多の象徴が凝縮して自己表現（Self-expression）の形をとりうるように水路づけされることが可能となると考えた。河合もまた箱庭作品をクライエントのイメージ、「世界」の表現として、あくまでも尊重すると述べている（河合、1982)。このように箱庭療法において表現されるものを、クライエントの心的世界の表現・投影、あるいは象徴として捉える考えは多くの論者によって支持されている。そして、その表現が創造的な力を持つこともまた多くの論者の一致するところである（Kalff、1966、岡田、1984、河合、1991、山中、2002、他)。山中（2002）は、「クライエントたちは、箱庭のなかでアクティブにこれらの玩具や形態を用いて、内的ドラマを演じながら、統合のプロセスを生じさせていく。この方法は非指示であり、言わば自身の内的リズムにそって、自身の創造力によって、自身のもつ内的資源との接触をもつことになるわけだ。かくしてクライエントは、自身の表現能力や感情を信じてもいいと思うようになり、かつてダメージをうけた内的安全感や、基本的安心感などをとりもどすことに役立つこととなるわけである」と説明している。河合は自由で保護された空間での箱庭への表現により自己治癒力が引き出されるが、そこに表現されるものが単なるカタルシスではなく、新しい創造あることが大切だとする。クライエントの意識的理解を超えた表現が創造性をもち、クライエントを癒すのだと述べている（河合、1991　p127)。

このような箱庭療法における自己表現をぴったり感と言うことがある。三木はクライエントがどれだけピッタリ自分自身と向き合っているか、箱庭に置かれた世界とクライエントが見て感じる世界とがどれだけピッタリしているかの感覚を、ピッタリ感と呼んだ。そして、クライエントがピッタリ感をもっているのか、セラピストがわかっていることが重要だとしている（三木・光元・田

中、1991　p49)。東山は箱庭療法がセラピーに効果的であるためには自己の本質をぴったりとした表現で表すことでできる過程を含んでいなくてはならないとする。そして、ぴったりとした感じがないと箱庭がおけず、箱庭療法は、「ぴったり感」「ぴったりイメージ」を直接表現できる手段だと述べている（東山、1994　p5)。また東山は、セラピストがクライエントの内界がわかることと、セラピストの直観をクライエントとコミュニケートすることの大事さを指摘している。その一つの方法として、箱庭語を提唱している。さらに東山は、人間には心のどこかに経験や判断に先立つなにものか（それ）が存在し、その何かに、今を照らし合わせて理解しているとする。箱庭療法も含め心理療法においても、クライエントとセラピストの共通理解を生む「ぴったりとした実感」が存在するが、その根拠となるのは経験や判断に先立つ何ものか（それ）の存在ゆえであるとしている。そして、箱庭療法のセラピストはその何ものか（それ）に気づき、それが活発になるようになることが必要であると言及している（東山、1994　p28)。

ぴったりとした自己表現が箱庭療法において重要となる。それはクライエントの心理的な作業の側面だけでなく、それを越えて本論で見てきたようなセラピストの在り様やセラピスト－クライエント関係が基礎にあり、それぞれのセラピストがそれぞれの「今・ここ」において、ぴったりとあることが重要となることがわかる。

Ⅴ　終わりに

本論は冒頭にも書いたように箱庭療法における関係性を中心に述べてきた。そしてそれと直接的に関係するいくつかの心の変容、治癒の考えを取り扱った。箱庭療法における心の変容、治癒に関する論点は多々あり、今回は取り上げることができなかったことも多い。例えば、箱、砂、玩具に関することにはほとんど触れていない。また、象徴やイメージに関しても、箱庭療法における重要な要素であるにも関わらず、充分な考察ができていない。岡田（1993）が挙げているフュージョン（溶解)、ブリコラージュ、美的治癒などに関しても言及できていない。箱庭療法における遊びの側面に関しても触れることができなかった。また、本論は箱庭療法における関係性とそれに関連する心の変容に関して、中核的であり、多くの論者が取り上げている観点を中心に構成したため、独創的な理論や新たな視点、発想関して充分に述べることができなかったものも少なくない。これらに関しても、今後、検討・考察していきたいと考えている。Lowenfelt や海外の箱庭療法研究者の文献を取り上げることはできなかった。これも今後の課題としたい。

箱庭療法だけにとどまらず心理療法全般にわたって、書籍や論文という形をとらず学会・研究会、教育の場で、口頭で伝えられていくものも少なくない。

ユング派ではない筆者が見落としていることや誤解していることなど研究を深めていかなければならない余地は広大であると感じている。是非、箱庭療法の先達・研究者・実践家の皆様にご教示いただきたいと思う。

文献：

東山紘久(1994)：箱庭療法の世界　誠信書房

樋口和彦(2000)：世界に拡がる箱庭療法　山中康裕・Ｓ・レーヴェン＝ザイフェルト・Ｋ・ブラッドウェイ（編）　世界の箱庭療法　―現在と未来　新曜社　pp 117-125

樋口和彦(2002)：箱庭療法の世界の現状．精神療法，28（2），183-190.

藤原勝紀(2002)：臨床イメージ法と箱庭．現代のエスプリ別冊　―箱庭療法の本質と周辺　箱庭療法シリーズⅡ，126-141.

Kalff,D.(1966)：Sandspiel Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche. Rascher Verlag: Zurich und Stuttgart.　河合隼雄（監修）大原貢・山中康裕（共訳）(1972)：カルフ箱庭療法　誠信書房

Kalff,D.(1982)：序文　山中康裕（訳）河合隼雄・山中康裕（編）　箱庭療法研究　誠信書房　pp i - iii

河合隼雄(1967)：ユング心理学入門　培風館

河合隼雄(編)(1969)：箱庭療法入門　誠信書房

河合隼雄(1982)：箱庭療法の発展　河合隼雄・山中康裕（編）　箱庭療法研究　1　誠信書房　pp iv - x vii

河合隼雄(1985)：箱庭療法と転移　河合隼雄・山中康裕（編）　箱庭療法研究　2　誠信書房　pp iii - xi

河合隼雄(1990)：カルフさんの思い出．箱庭療法学研究，3（1），85-86.

河合隼雄(1991)：イメージの心理学　青土社

河合隼雄(1992)：心理療法序説　岩波書店

河合隼雄(1993)：物語と人間の科学　岩波書店

河合隼雄(1998)：ユング派の心理療法とは　河合隼雄（編）ユング派の心理療法　日本評論社　pp 1-11

河合隼雄・中村雄二郎・明石箱庭療法研究会(1984)：トポスの知　―箱庭療法の世界　ＴＢＳブリタニカ

河合隼雄・樋口和彦・山中康裕・岡田康伸(2002)：箱庭療法の導入から今までの諸問題、現代的意義．現代のエスプリ別冊　―箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ，9-32.

河合俊雄(2002)：箱庭療法の理論的背景．現代のエスプリ別冊　―箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ，110-120.

木村晴子(1985)：箱庭療法　―基礎的研究と実践　創元社

木村晴子(1993)：箱庭療法．別冊発達16　―カウンセリングの理論と技法，132-140.
木村晴子(1999)：基本に戻る．箱庭療法学研究，12（2），1-2.
Menuhin,J.(1992)：Jugian sandplay The wonderful therapy.Routledge through The English Agency. 山中康裕（監訳）國吉知子・伊藤真理子・奥田亮(訳)(2003)：箱庭療法　―イギリス・ユング派の事例と解釈　金剛出版
三木アヤ(1994)：治療者とクライエント関係の内的空間性について．箱庭療法学研究，7（2），1-2.
三木アヤ・光元和憲・田中千穂子(1991)：体験箱庭療法　―箱庭療法の基礎と実際　山王出版
光元和憲・田中千穂子・三木アヤ(2001)：体験箱庭療法Ⅱ　―その継承と深化　山王出版
織田尚生(1991)：箱庭療法と逆転移．箱庭療法学研究，4（1），1-2.
織田尚生(2000)：新しい時代の箱庭療法への期待　山中康裕・S・レーヴェン＝ザイフェルト・K・ブラッドウェイ（編）　世界の箱庭療法　―現在と未来　新曜社　pp 131-137
織田尚生(2002)：シンボルとしての神話．現代のエスプリ別冊　―箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ，214-225.
岡田康伸(1984)：箱庭療法の基礎　誠信書房
岡田康伸(1993)：箱庭療法の展開　誠信書房
齋藤眞(2002)：治療要因．現代のエスプリ別冊　―箱庭療法の現代的意義　箱庭療法シリーズⅠ，121-134.
アンドリュー・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト(1993)：ユング心理学辞典　山中康裕（監修）濱野清志・垂谷茂弘（訳）　創元社
シュピーゲルマン　J,M.・河合隼雄(1994)：能動的想像　―内なる魂との対話　町沢静夫・森文彦（訳）創元社
田中信市(2004)：箱庭療法　こころが見えてくる方法　―不登校・情緒不安定・人間関係の悩み　講談社＋α新書
山中康裕(1993)：コンステレーション　アンドリュー・サミュエルズ、バーニー・ショーター、フレッド・プラウト　ユング心理学辞典　山中康裕（監修）濱野清志・垂谷茂弘（訳）　創元社
山中康裕(2002)：箱庭療法の現在．精神療法，28（2），135-140.

付記：本論は、2006年度南山大学パッヘ研究奨励金「Ⅰ－A－２（特定研究助成・一般)」の助成の成果の一部である